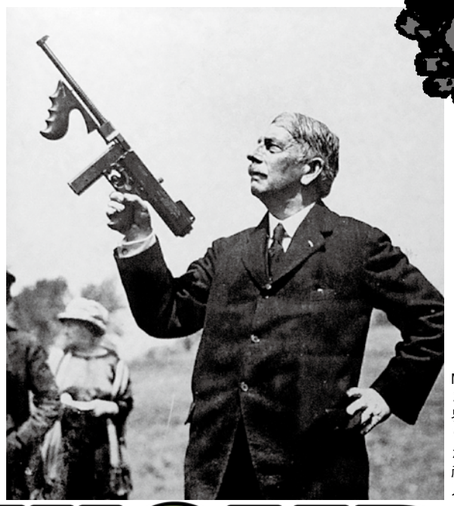
機関銃の普及により膠着した戦局は“サブマシンガン”という新たなコンセプトを生み出した。

世界初のサブマシンガン その名はトンプソンSMG

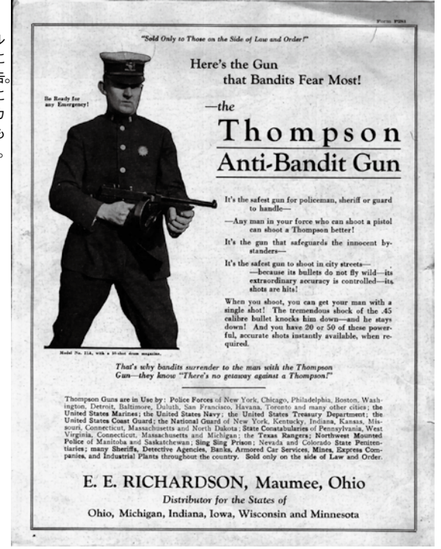
銃器の歴史を振り返ってみると、現代まで名を残す傑作がいくつも挙げられる。バトルライフル、アサルトライフル、サブマシンガン、そしてピストルといったそれぞれのカテゴリーにおいて、誰もが知る傑作が存在する。それらは、後の銃器開発に影響を与え、または人々の記憶に強く残る働きを担ってきた。今回、ここで紹介するトンプソン・サブマシンガン（＝Thompson submachine gun）も、誰もが認めるサブマシンガンの代表のひとつといえる。いや「代表のひとつ」と言うより「サブマシンガン」というカテゴリーを創り上げた一挺である。それというのも、トンプソン・サブマシンガンこそが、世界初のサブマシンガンだからである。

「トンプソン・サブマシンガンが世界初のサブマシンガン」と記すと、反論もあると思う。ドイツのベルグマンMP18やイタリアのベレッタM1918の方が時期的に先に誕生・活躍しており、さらに詳しく見ていくと、それらの二挺以前にもサブマシンガンは製造されているからである。が、やはり、細かい話になってしまうが、トンプソン・サブマシンガンが世界初のサブマシンガンであったと言える。何とすれば「サブマシンガン」という呼称そのものが、トンプソン・サブマシンガンで初めて使用されたからに他ならない。米国のオート・オードナンス社は、ピストル弾の.45ACP弾をフルオートで発射できる新型

（P12へ続く）



M1921を手にしたトンプソン。彼はこの銃を第一次世界大戦の塹壕戦における切り札として開発を始めたのだが、実用的なモデルが量産されたのは1920年代に入ってからだった。



"Sold Only to Those on the Side of Law and Order!"

Here's the Gun that Bandits Fear Most!

—the Thompson Anti-Bandit Gun

Be Ready for any Emergency!

It's the safest gun for policeman, sheriff or guard to handle—

—Any man in your force who can shoot a pistol can shoot a Thompson better!

It's the gun that safeguards the innocent by-standers—

It's the safest gun to shoot in city streets—
—because its bullets do not fly wild—its extraordinary accuracy is controlled—its shots are hits!

When you shoot, you can get your man with a single shot! The tremendous shock of the .45 caliber bullet knocks him down—and he stays down! And you have 20 or 50 of those powerful, accurate shots instantly available, when required.

Model No. 21A, with a 20-shot drum magazine.

That's why bandits surrender to the man with the Thompson Gun—they know "There's no gunnery against a Thompson!"

Thompson Guns are in Use by: Police Forces of New York, Chicago, Philadelphia, Boston, Washington, Detroit, Baltimore, Duluth, San Francisco, Havana, Toronto and many other cities; the United States Marines; the United States Navy; the United States Treasury Department; the United States Coast Guard; the National Guard of New York, Kentucky, Indiana, Kansas, Missouri, Connecticut, Massachusetts and North Dakota; State Constabulary of Pennsylvania, West Virginia, Connecticut, Massachusetts and Michigan; the Texas Rangers; Northwest Mounted Police of Manitoba and Saskatchewan; Sing Sing Prison; Nevada and Colorado State Penitentiaries; many Sheriffs, Detective Agencies, Banks, Armored Car Services, Mines, Express Companies, and Industrial Plants throughout the country. Sold only on the side of Law and Order.

E. E. RICHARDSON, Maumee, Ohio
Distributor for the States of
Ohio, Michigan, Indiana, Iowa, Wisconsin and Minnesota

オート・オードナンス社のトップセールスマンであったE.E.リチャードソンによるトンプソン・サブマシンガンの広告。悪人御用達となってしまったこの銃に対するイメージを払拭するため、メーカーは“対強盗銃”という触れ込みとともに警察官の写真やイラストを多用した。

レンドリース法によってアメリカから送られたM1928を構えるチャーチル。上と下の写真を比べるとトンプソンは弾倉だけでなくフォアグリップも異なっており、上のフォアグリップはあまり見かけないタイプである。

THOMPSON SUBMACHINE GUN CAL.45

●Report by Ken Nozawa
●図版解説／鈴木健太郎
●Photo／NARA、U.S.ARMY、IWM、WPP Archive、FBI Photo、Shutterstock、Thompson submachine gun (Auto-Ordnance Corporation)、West Point Museum

1917年に作られた最初の試作型"PERSUADER"のサイドビュー。この試作型は従来の機関銃と同じく布ベルトによる給弾機構を備えており、給弾不良が頻発するという理由により第二次試作型の"ANNIHILATOR"では弾倉を用いた給弾方式に改められるのだが、専用の箱型弾倉とドラム型弾倉が開発される以前にはM1911拳銃の弾倉を流用できるようにしたバージョンも作られていた。

THOMPSON SUBMACHINE GUN CAL.45

広島と長崎に原爆を落とした国の市民の声とは思えないダブルスタンダード振りだが、それはともかく、ドイツを糾弾する声は盛り上がった。米国は1917年4月にドイツに宣戦布告し、第一次世界大戦に参戦しているが、そうなると、米国内のビール製造企業への反発の声も高まることとなった。それというのも、米国においてビール製造を手がけていた企業関係者のほとんどがドイツ移民であり、「ビール＝ドイツ＝悪」の図式が出来上がってしまっていたのだ。またその時期、ドイツ移民に対し、ここでは書けないほどの差別と虐待が日常的に散見されるまでに治安は悪化していった。

1919年1月。米国の全48州（当時）の内、36州で修正決議は批准され、1920年からの禁酒法が施行されることとなる。

長々と禁酒法について語ってしまったが、この禁酒法がトンプソン・サブマシンガンの知名度を高め、販売を伸ばすことに繋がるとは、バラフライ効果のひとつなのだろうか――。

禁酒法が施行されると、そこに旨みを感じたのはギャングたちだった。それまでギャングたちのシノギ（稼ぎ）といえば賭博と売春が主であったが、そこに酒類の独占取引の時代がやってきたのだ。シノギの額もケタ違いとなる。賭博や売春に関わる客層はひと握りでしかないが、飲酒は不特定多数の大人の嗜みであり、ギャングたちは本格的に密造・販売へと突き進んだ。当時の酒税は米国全体の税収の10%と言われ、州によっては50%にも達していたが、その莫大な税収が国ではなく、ギャングたちの懐に流れ込んだのだ。「禁酒法何するものぞ！」と、モグリ酒場へと足を運ぶ市民は途絶えることなく、しかもその客の中には政治家や警察官も含まれ、その飲み代の一部がギャングたちを潤した。

オハイオ州クリーブランド警察で行なわれたトンプソン・サブマシンガンのデモンストレーション。ここで用いられているのはおそらく第二次試作型"ANNIHILATOR"で、オート・オードナンス社ではトンプソン・サブマシンガンの量産が進められる以前からこの銃の売り込みを積極的に行っていた。

そうなると、世の支配権に変化が発生した。税収の落ち込みから公務員、法執行機関で働く人々の減給や支給の遅延が発生し出すと、生活苦から賄賂を受け取る警察官も増えていき、あろうことかギャングたちの子飼いとなった警察官の中には、彼らの犯罪を見逃すばかりでなく、取り締まり情報の密告や、敵対するギャングの違法捜査を行なうなど、無法地帯と化していったのだ。その代表的な都市がシカゴであり、かの有名なアル・カポネが暗躍したことでつとに有名である。

米国では、有名都市にはキャッチフレーズがつけられることが多い。ニューヨークであれば「ブロードウェイの街・ニューヨーク」であり、ロサンジェルスであれば「映画の街・ロサンジェルス」だ。残念ながらシカゴは「犯罪都市・シカゴ」と呼ばれてきた。凶悪犯罪の発生件数が飛びぬけて多かったことから、そう名付けられたが、実は現代においてもシカゴは重犯罪が多いという統計がある。

話を1920年代のシカゴに戻そう。

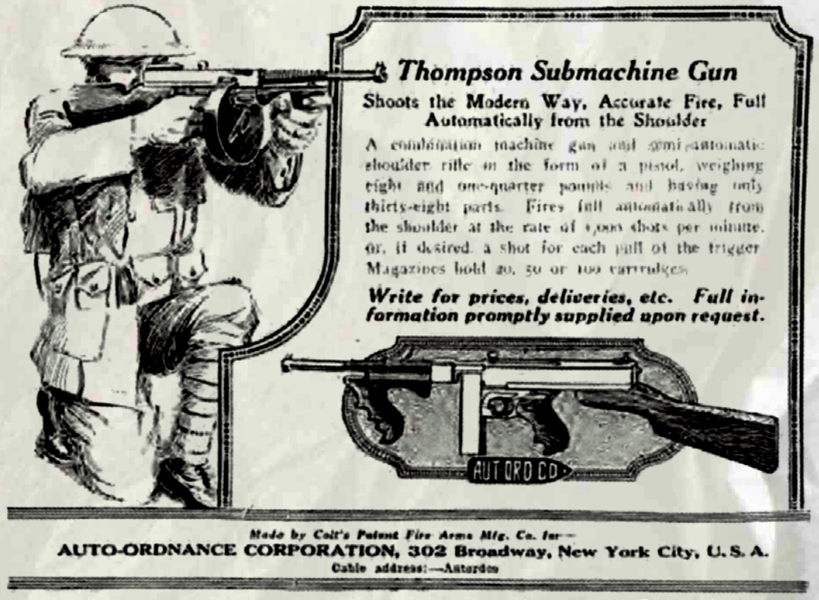
アル・カポネ（= Al Capone：1899年1月17日-1947年1月25日）は、シカゴで高級ホテルを根城に、酒の密造・販売・売春業・賭博業の犯罪組織を運営してきたが、禁酒法の施行以来、他組織との抗争は日を追うごとに激しくなり、必然的に武装化も強化された。トンプソン・サブマシンガンは、もともとは「強盗が一番恐れる銃」とのセールストークで販売されたが、その最大の顧客がギャングたちだった……というのは、皮肉なものである。発売時の価格が現代での48万円程となれば、羽振りの良いギャングたちでなければ購入できなかったのかもしれない。

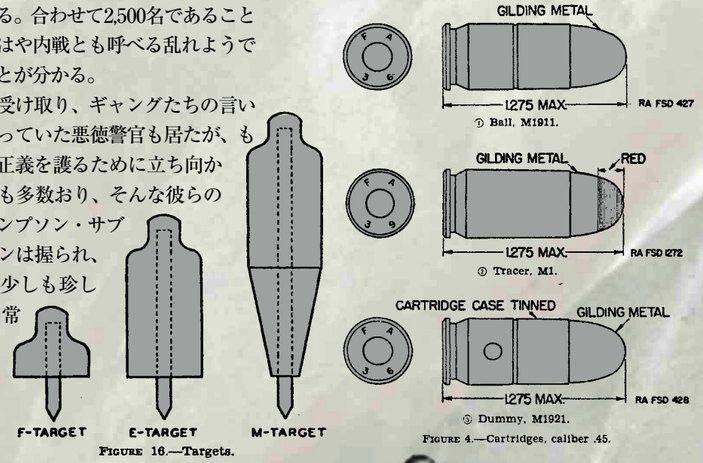
ギャングたちの縄張り争いは過激なもので、対抗組織のアルコール類密造所を襲っての放火、輸送途中の強奪、対抗組員の抹殺と、シカゴ市民は穏やかに暮らせる状況になかった。もちろん、その抗争では、トンプソン・サブマシンガンと1911ピストルを主力火器としての激しい銃撃戦が繰り広げられ、記録では、法執行機関関係者は500名、ギャングおよび一般市民は2,000名が命を落としているとされている。合わせて2,500名であることから、もはや内戦とも呼べる乱れようであったことが分かる。

賄賂を受け取り、ギャングたちの言い成りになっていた悪徳警官も居たが、もちろん、正義を護るために立ち向かう警察官も多数おり、そんな彼らの腕にもトンプソン・サブマシンガンは握られ、銃撃戦が少しも珍しくない日常がシカゴの街にはあった。「犯罪都市・シカゴ」と呼ばれたのも無理はない。

また、これはシカゴに限らなかったが、1920年代から30年代に掛け、新手の銀行強盗、郵便局強盗が頻発し、そこでの強盗団もトンプソン・サブマシンガンを愛用し、派手に撃ちまくっては現金をさらい、そのまま一気に逃げ去るという手口が広まった。いわゆるシュート アンド ゲッタウェイ（=Shoot and get away：犯行後に直ぐに逃げるの意）が広まったのだ。

トンプソン・サブマシンガンを愛用した人物のひとりに、銀行強盗で知られるジョン・デリンジャー（John Dillinger：1903年6月22日～1934年7月22日）がいるが、ギャングや強盗団たちが警察官やFBIエージェントたちと同等に渡り合えた裏には、1913年にフォード社が進めた



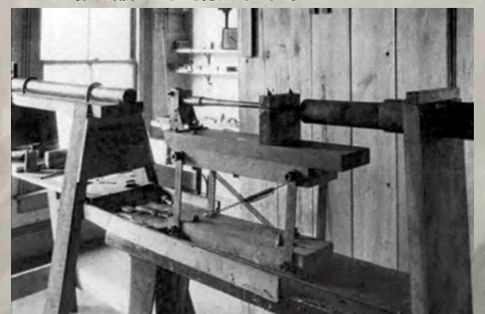


（上）軍への売り込みのためM1921を構える兵士が描かれた広告。トンプソン・サブマシンガンの量産は当初コルト社によって行なわれており、この広告ではオート・オードナンス社とコルト社の併記となっている。（下）アメリカ軍のマニュアルに示された射撃訓練用ターゲットと.45ACP弾のイラスト。軍規格のターゲットはFBIの射撃訓練でも用いられている。

FIGURE 4.—Cartridges, caliber .45.

FIGURE 16.—Targets.

ブリッシュロックの効果を確かめるために作られた実験装置。実験にはさまざまな口径のライフル弾と拳銃弾が用いられたが、ライフル弾では効果がほとんど見られなかった。



第二次試作型"ANNIHILATOR"のサイドビュー。ドラム型弾倉に付けられた装着用のリブとレシーバーのスリットにがはっきりと見えている。バットストックはこの試作型から付けられるようになったのだがここでは取り外した状態となっている。"ANNIHILATOR"には着剣装置を備えたものや照準器を省略したものなどいくつかのバリエーションがあり、ここでも照準器の姿は見当たらない。トンプソン・サブマシンガンの試作型は"PERSUADER"と"ANNIHILATOR"で大きくデザインが異なるが、歴史家やコレクターの間ではどちらもモデル1919の名で呼ばれることが多い。

ミリタリーパッチの研究③

T-Walls Silent Sentry
沈黙のコンクリート歩哨

兵士たちを守ったコンクリートに描かれた紋章

構成／COMBATマガジン編集部

**Tウォールは「沈黙の歩哨」と呼ばれる。T字型をしたコンクリートブロックの正体は車止めだ。
一切の不平不満や泣き言、文句、苦情を口にしない。1週間に7日、1日24時間、基地を守る。
Tウォールが身体を張って防ごうとしているのは、即席爆弾IEDである。
そのIEDは決まって車に積まれてやってくる。**

憔悴した表情を見せる第1騎兵師団あるいは第101空挺師団のLRRP隊員。睡眠の際も一切警戒を解くことができない長距離偵察任務では、特別な訓練を受けた者であっても初歩的なミスを犯す危険が常につきまとう。任務が成功裏に終わるかどうかは結局のところ徹底したチェックと偵察チーム各員の緊密な連携にかかっている。

プロジェクトデルタ偵察マニュアル Part 5

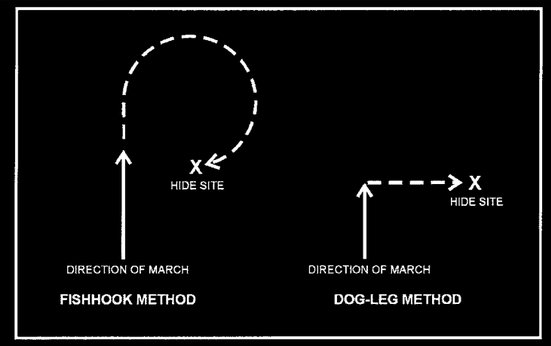
ベトナムにおける長距離偵察のA to Z

文／鈴木健太郎　写真／U.S. ARMY, USMC, USAF, WPPアーカイブ

（左）地図を見ながら進路とRON地点の選定を行なう第1騎兵師団のLRRP隊員。地図が防水のためにビニール袋にくるまれ、敵襲に備えてCAR-15が手元に置かれているのに注意。右の隊員はリストウォッチを文字盤が内側に来るように付けているが、これは光の反射によって敵に存在が露呈するのを防ぐ工夫で、偵察部隊や特殊部隊では同じような例をいくつも見ることができる。（右）姿勢を低く保ちながら茂みの中を移動する空軍のセキュリティーチーム。チームの全員が迷彩服を着用し顔にもペイントを施しているが、残念なことにCAR-15の弾倉が光を反射してその効果を半減させてしまっている。1981年10月 オーストラリア

RON（Remain OverNight=夜間待機）に関する諸注意

1 偵察チームはRONに関する適切な手順を身に付けるため、あらゆる訓練施設を利用すること。たとえシューティングレンジであってもRONの訓練はできる。訓練地域の多くは我々が呼ぶ“セーフゾーン”ではない。
2 RONの少なくとも2時間前には地図を頼りに暫定的なRON地点を選定しておく。
3 RON地点へは直線的なルートを使わず、何度か回り道をしてから入ること。
4 適切なRON地点は一度通過した後、“釣り針技法”（釣り針を描くように後ろへ回り込む方法）で入り、前もって選んでおいたポジションについて進路の監視を行なう。
5 ポジションについたら周囲40〜60メートルの地域の安全が確認されるまでは装備を手放さずに厳戒態勢を保持する。
6 リュックサックは暗くなるまで降ろすべきではない。
7 暗くなる前にチームメンバーのそれぞれがRON地点の周囲にある木や茂みの場所について正しく記憶しておくこと。
8 RON地点へチームを進める場合は、緊急事態に備えてポイントマンを通常の位置ではなくもっとも使用する可能性が高い逃走ルートで先頭になるように配置する。
9 偵察チームが味方の砲撃の射程内にあり、防備が十分である場合は日暮れまでに近くの木や杭の位置を覚えておき、砲撃を修正する際の目印として役立てる。



（上）後年の改訂版マニュアルに示された、偵察チームの進み方に関するイラスト。ここでは“釣り針技法”と“犬の足技法”の二つがあるが、最初に作られたマニュアルではこのようなイラストはなく、“犬の足技法”の紹介もない。“釣り針技法”は一般的には敵味方ともに右利きが多いため、左回りで行なうとこちらが銃を構えながら移動するのが容易になり、右回りでは敵の反撃が遅くなるという特徴がある。（下）全周警戒の態勢を取る海兵隊の偵察チーム。この態勢は死角がなく、同士討ちも避けることができるが、一度の攻撃でチームが全滅する危険もある。2013年7月 ハワイ

SHARK SHOOTER LIVE-FIRE REPORT!
by Muneki Samejima

Staccato XL シリーズ

日本でも馴染みの深いガン・メーカーのひとつ、STI社。1998年にトイガン・メーカーのKSCが同社のモデルを日本でトイガン化したことでその名は日本でも一気に広まった。しかし、2020年にSTI社は社名変更を行ない「Staccato（スタカート）」として生まれ変わった。今回は、その新生スタカートの主力モデル、XLシリーズを紹介しよう。

今回、ご紹介するこちらの個体は、スタカート社の専属シューター、ミシェル・ヴィスキュウシ用に同社が用意した特別仕様のカスタムだ。グリップやトリガーなど、市販品とは異なる仕様となっている。

Staccato XL
(Michelle Viscusi ファクトリー・カスタム仕様)
- 弾数:17発～20発（※ファクトリー純正）
- 重量:約1,077g（※マガジン含まず）
- 口径:9×19㎜
- 価格:3599.00ドル

（写真下）2011シリーズのマガジンは1911シリーズと同じく、基本的に各メーカー同士で互換性がある。写真のマガジンはまだSTI時代の筆者の私物。現行品との違いは刻印程度だ。

（写真右）マガジンの装弾数は左のファクトリー純正状態だと20発。そして、右のロング・マガジンは26発。ただし、写真の状態ではベース・パッドとスプリング・フォロワーをアフター・マーケット製に換装したことで、それぞれ23発と29発に増大してある。

STIとStaccato（スタカート）の歴史

スタカート社は、2020年に社名変更を行なった元STI社だ。STI社は、もともとは1911系のカスタムを手掛けるカスタム・メーカーであり、チップ・マコーミック、ヴァージル・トリップ、サンディー・ストレイヤー、マイケル・ヴォイド等、数多くのガンスミスやコンペティティブ・シューターがその歴史に関わっている。1911はプラクティカル・シューティングの世界で中心的な存在の銃だった。しかし、弱点のひとつに装弾数の少なさがあげられた。そこで、マガジンをハイキャップ化しつつも、必要以上に重量が増えないことが追求され、1993年頃にプラスティック・グリップとスチール・フレームを組み合わせた画期的なデザインの2011シリーズは発売された。多くの人がご存知の通り「2011」は、1911シリーズの100年後の姿という意気込みを表したものだ。

その意気込み通り、2011はプラクティカル・シューティングの世界を一変させた。2011が登場してからSTI社も色々な変革が起き、サンディー・ストレイヤーは同社を離れ、マイケル・ヴォイドと共に独自で2011ベースのカスタム・メーカー、ストレイヤー・ヴォイド（SV社、後のインフィニティ）を設立した。同社は、暫くの間STI社とパテントをシェアしていた。1994年頃にはデイブ・スキンナーがSTI社を買い取り、STI Internationalとした。2005年、デイブ・スキンナーは会社を従業員へ売却し、ESOP（Employee Stock Ownership Plan ※従業員による株式所有）の会社となった。

トイガン・メーカーと実銃メーカーの提携

話は前後するが、1998年頃に日本でもKSCからSTI社の製作したグリップを使用したエアソフトガンがKSCから発売された。STIシリーズが話題になった何よりの理由は、単なるトイガンとして製品を発売したのではなく、本家STI社と正式に契約を結び、発射機構とは関係ないプラスチックのグリップ部分にSTI社が製造したグリップを使用したことだ。つまり、日本国内で合法的に「実銃パーツ」が使用されたエアソフトガンが製造されたのだ。正確にいえば、KSCのエアソフトガン用にSTI社が生産したグリップであり、実銃用とは内部の金属インサートがあるかないかの違いがあったのだが、実銃メーカーがトイガン用にパーツを生産し、それを使用してエアソフトガンが販売されるのは、史上初の出来事だった。

日本に居た頃、僕はSTIのエアソフトガンで練習を積み、アメリカに来てからは、本家STI社のグリップやフレームをベースにしたレースガンを使ってきたが、何の違和感もなくトイガンから実銃への持ち替えが出来

SIG1911 PRO-CUT CUSTOM

内部構造はベーシックなマグナメカ。シングル・サイズのマガジンを採用しながら、バージョン3メカがスライドをハイスピードでブローバックさせ、強烈なキックを手に伝える。

アメリカのカスタム・メーカーが製作するM1911とは一味違うSIG1911。メインスプリング・ハウジングにもディンプル・パターンが加工され、手のひら全面にしっかりと食い込んで独特のグリップ・フィーリングを提供してくれる。

WESTERN ARMS

BERETTA M84FS CBHW Ver.

絶大なファイアー・パワーを備えた ミディアム・サイズのストリート・ファイト・モデル

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
問ウエスタン アームズ☎03-3407-5922
http://www.wa-gunnet.co.jp

1996年にモデルアップされ、数々のバリエーションが製作されてきたWAのベレッタM84FS。フルサイズ・モデルのM92FSと並ぶ、WAベレッタ・シリーズのロング・セラー・モデルだ。市場デビューから27年に及ぶ歴史を誇り、素材、フィニッシュ、外観など、数多くのバリエーションが製作され現在に至っている。今月は、コンパクトながら絶大なファイアー・パワーを誇るイタリアン・オート、M84FSの最新ベーシック・タイプ、存在感のある重量とオールスチール・モデルの重厚さを漂わせるCBHWバージョンが再登場する。

1975年に大口径セミオートM92シリーズを完成させたベレッタは、平行して第二世代のミディアム・オートM80シリーズを開発。その後M92に追加された機能やマイナー・チェンジは、ほぼそのままM80にも適用されることになった。M84FSはその最終発展型。口径が.32ACP口径から.380ACP（9×17㎜、9㎜ショート）に変更され、ラウンド・タイプのトリガー・ガードがフィンガーレスト・デザインとなって現在に至っている。“チーター”のニックネームで知られるM84FSは、13+1発のファイアー・パワーを誇り、スムーズなダブ

※撮影用モデルはプロトタイプのため、量産品とは仕様が異なる場合があります。

ミリタリア・ラウンドアップ!

Militaria Roundup!

アメリカ陸軍フライト・ユニフォームとベトナム戦争の空軍パッチ

フライトジャケットといえば基本的に空軍と海軍航空隊のユニフォームだが、陸軍も独自に航空部隊を保有しており、航空兵のためのユニフォームを制定している。今回は一般にはあまり知られていないアメリカ陸軍のフライヤーズ・ジャケットと、前シリーズで取り上げられなかったベトナム戦争中のアメリカ空軍パッチを紹介しよう。

解説／菊月俊之　写真／青木健格　撮影協力／サムズミリタリ屋 https://www.sams-militariya.com、中田商店☎03-3823-8577 https://www.nakatashoten.com/

アメリカ陸軍のフライト・ユニフォーム

アメリカ空軍の前身は陸軍航空隊で、これが1947年の国家安全保障法により空軍として独立した経緯を持つ。5月号でも触れたが、空軍独立により、陸軍が保有する機体重量（すなわち機体のサイズ）は制限され、任務も同様に限定されたものとなった。

アメリカ陸軍のフライト・ユニフォームは陸軍規定（AR）670-1 “Wear and Appearance of Army Uniforms and Insignia”により年間を通じて着用するものと規定され、1991年版では①ワンピース・フライト・カバーオール、②フライト・グローブ、③フライト・ジャケットの3アイテムで構成。これに各種アクセサリーが加わる。

フライト・ユニフォーム用アクセサリーの内訳は①黒革製コンバット・ブーツ、②ヘッドギア、③OG/ブラック・クッションソール・ソックス、④下着（Undergarment）、⑤ブラウン・アンダーシャツ、⑥被服用装備（Clothing Equipment）、⑦フライヤーズ・グローブから成り、③のヘッドギアはさらに①ベレー、②BDUキャップ、③エビエーター・ヘルメットから構成されている。

UH-60ブラックホーク
アメリカ陸軍航空は空軍の縄張りを侵さないように制限が加えられており、その主力を占めるのはヘリコプターとなっている。写真は現用のシコルスキーUH-60ブラックホークで、アメリカ以外にも日本をはじめとする西側諸国の軍隊で使用されている。(Photo : U.S. ARMY)

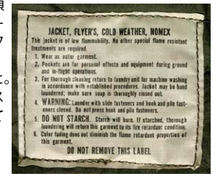
陸軍フライヤーズ・ジャケット
JACKET FLYER'S(EXPANDABLE WRIST AND WAIST)

フライヤーズ・ジャケットは陸軍の飛行服を構成するアイテムの一つで、スーツ（カバーオール）の上に着用するアウターと規定されている。採用時期は不明だが、資料等から70年代の導入と思われる。アイテム称は「飛行士用ジャケット」とそっけないが、カッコ付で「伸縮性リスト（手首）とウエスト（腰）」と注釈が加わる。

フライヤーズ・ジャケットには着用する気候に合わせて①コールド・ウェザーと②ライトウェイトの2タイプが存在。アメリカ陸軍ではコールド・ウェザーの気候区分を“ウェット”と“ドライ”に分けており、前者を気温—1～4℃、後者を気温—10℃以下と規定している。フライトジャケットの着用温度域とは異なるが、①のコールド・ウェザーはフライトジャケットのインターミディエート・ゾーン（—10～10℃）、②のライトウェイトがフライトジャケットのライトゾーン（10～30℃）に相当するジャケットと言える。

コールド・ウェザー COLD WEATHER
陸軍フライヤーズ・ジャケットは袖口とウエスト部分にニットを使用した短ジャケットで、コールド・ウェザー版とライトウェイト版でデザインは基本的に共通。前者は内張りがキルトになっており、前合わせやポケットのディテールに若干の違いが見られる。(撮影協力:中田商店)

ラベル
1978年会計年度発注分コールド・ウェザー版のラベル。アイテム名の最後に“ノーメックス”と付いているのに注意。ノーメックスはデュポン社が開発した難燃性アラミド繊維で、耐熱性と耐久性に優れるため1970年代から各種フライト・ユニフォームの素材として使用され始めた。ラベルは2つに分かれ、右前身頃のラベルには着用上の注意事項が記載されている。内容は主にクリーニングに関するもので、「洗濯時にはフック＆パイル・ファスナー（ベルクロ）とスライド・ファスナーは閉じること。フック＆パイル・ファスナーはプレスしてはならない」、「洗濯糊は使用してはならない」とある。



陸軍フライト・ユニフォーム
負傷兵後送（メディバック）の訓練を行なう第1騎兵師団の衛生兵とヘリ・クルー。クルーが着ているのは空軍と同じCWU-27Pフライング・カバーオールで、色がデザート・タンのタイプ（空軍では“デザート・フライング・デューティー・ユニフォーム（DFDU）”と呼ばれる）。CWU-27/Pカバーオールは素材に耐高熱、静電機防止処理された不溶解性アラミド繊維をブレンドした平織りの生地を使用している。(U.S. Army)

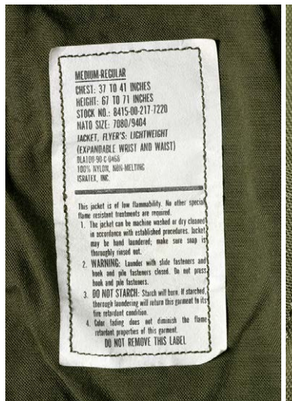
ジャケット背面はシンプルな1枚布だが、両肩には平面を曲面化して動きやすさを増すためのダーツ（つまみ/矢印部分）が付けられている。

襟
襟はワイシャツ等で一般的なスタンダード・カラーで、CWU-36/PやCWU-45/Pと違って先端が尖ったデザインが特徴。襟の内側にはベルクロ固定式のクロージャーが付き、立てた状態で前を閉じることができる。このあたりはフィールド・ジャケットと通じるデザインだが、これはジャケットが陸軍用なのが理由だろう。

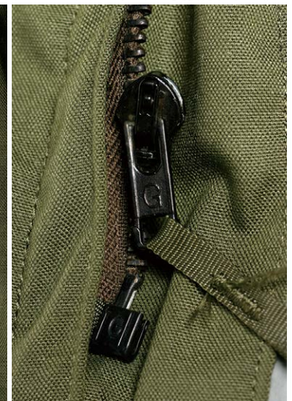
コールド・ウェザー・フライヤーズ・ジャケットは防寒のため内張がキルティングになっており、前合わせの右前身頃に前立て（プロテクティブ・フラップ）が付く。写真のジャケットは2か所にラベルが取り付けられており、左前身頃下がインストラクション（使用説明）・ラベル。

サイド・ポケット
ジャケット両側のサイド・ポケットには長方形のフラップが付く。フライトジャケットの場合ポケットはスナップファスナーで閉じられるが、陸軍フライヤーズ・ジャケットではベルクロが使用されている。

ラベル・バリエーション
フライヤーズ・ジャケットのラベル1枚のものも存在（写真は1990年会計年度発注分のライトウェイト版）。若干配列は異なるが、内容は2分割式と同じ。アイテム名にコールド・ウェザー版と違い“ノーメックス”と入っていない点に注意。これは次ページで紹介する1974年発注分も同じ。



正面合わせ
前合わせは各種フライトジャケットと同様にスライドファスナーで閉じ、内側には風の侵入をプロテクティブ・フラップ（前立て）が付く。スライドファスナーは真鍮製で写真のものには“G”のマーキングが入っているがメーカーは不明。フライヤーズ・ジャケットにはスコービルやタロンのスライドファスナーも使用されている。



ライニング（内張り）
ジャケットの内張り“ヘチマ”または“ヒョウタン”型と呼ばれるキルティングで、中綿が偏りにくいのが特徴。M1965フィールド・ジャケットやフィールド・パーカの防寒ライナーでも同じタイプのキルティングが使用されている。

多用途/ペンシル・ポケット
アメリカ軍フライト・ユニフォームに共通のデザインである、左袖上腕のポケット。ジャケットとしてはB-15Cから導入されたもので、当初はシガレット/ペン・ポケットと呼ばれたが、現在では多用途（Utility）”と名称変更されている。

TOKYO MARUI

GAS BLOWBACK SHOTGUN

SAIGA-12K

発売と同時に大ヒット!
3発同時発射
ガスブローバック・
ショットガン第1弾!

衝撃的な発表から2年にも亘る熟成期間を経て、東京マルイ／SAIGA-12Kが遂に発売され大ヒット中!モチーフとなった実銃はAKシリーズから転用&アレンジされたガス圧作動システムで耐久性・信頼性に優れ、BOXマガジンで再装填が素早く行なえる実力派の戦闘ショットガン。それを3発同時セミオート発射のガスブローバック仕様で堂々のモデルアップ!

※ショットシェル型マガジン(2個入り)￥1,958 はイメージアクセサリーとして置いています。ガスブローバック・ショットガン SAIGA-12Kでは使用しません。

Photo & Text by Takeo Ishii　東京マルイ☎03-3605-1113 www.tokyo-marui.co.jp

SAIGA-12K　● 全 長:666mm/908mm ●銃身(インナーバレル)長:300mm　●重量(空マガジン含):3,140g　●パワーソース:ガンパワーHFC134a & ノンフロン・ガンパワー ●作動方式:ガスブローバック、HOP-UP搭載 ●装弾数:45発(※3発同時発射×15ショット)　●価格60,280円　●大好評発売中!

見えない部分までリアルに造り込まれたボルトアッセンブルには315gの重量がある。コイツが.12ゲージ・シェルの排莢・装填距離「85mm」を力強くストロークし“ガツン!”と重い反動を演出。

約19mm径の大型ピストン&専用ブローバックエンジンが生み出す強烈なリコイル!　金属同士がガチでぶつかる感触にはショットガンらしい重厚感も。

スチール製のレシーバーカバーを外すとリアルなリコイルガイドアッセンブルが露出。日常メンテナンスに必要なフィールド・ストリッピング（=通常分解）が実銃同様スムーズに行なえる。

極太のアルミ製アウターバレル先端にはネジで着脱可能なダミーのチョークナット。

思いのほか細身で薄いグリップはガスブロAK（系）ならでは。セフティレバーも、位置といいデザインといい素晴らしい仕上がり。

AK47の血統に連なるコンバット・ショットガン

「SAIGA（サイガ）-12K」はAKシリーズの開発・生産を行なっていたカラシニコフ・コンツェルンの後継企業、イズマッシュ社が製造する.12ゲージ・セミオート・ショットガンだ。

銃身長は17インチで、軍・警察用ショットガンで一般的な20インチ銃身よりも「短い」ことを意味する「K」がモデル名に付いた。短銃身になった分、銃口に取り付ける「チョーク」という器具によって散弾パターンを調整する。

ガス圧作動セミオート・システムはAK-47から転用&アレンジされたもので耐久性・信頼性に優れ、箱型マガジンの採用で再装填が素早く行なえるため、コンバット（=戦闘用）ショットガンとしての実力は瞬く間に世界中が認めるところとなった。

畳むとしっかりロックされるフォールディング・ストックでコンパクトに運搬・収納。肉厚で頑丈なヒンジで展開時もガッシリ!

月刊 THEグリーンベレー GREEN BERET vol.52

GREENBERET MEETING THE 2nd SF-ODA KAI

第2回ODA会 in 関西

文／DJちゅう　写真／DJちゅう、ODA会参加者提供
撮影協力／サバイバルゲームフィールド COMBAT ZONE SIERRA
https://www.combatzonesierra.com

ニッポンのちからこぶ

写真・文／菊池雅之

令和5年度 富士総合火力演習

毎年恒例の富士総合火力演習が今年も行なわれた。コロナ禍以前は広く国民にも公開されていた。実弾射撃訓練を見学する機会はほとんどないため、抽選制の入場券は当選倍率30倍を超えるプラチナチケットとなるほどで、毎年多くの人が演習場に詰めかけた。今年も残念ながら一般公開はされなかったが、各種火器・火砲による大迫力の射撃訓練が繰り広げられた。

10式戦車によるスラローム射撃の瞬間。土煙を巻き上げて車体後部を滑らせながら120mm滑空砲が火を噴く。今年の総火演が10式、90式、74式の３世代戦車が集まる最後となった。

“総火演”の略称で広く国民にも知られている「富士総合火力演習」。今年も、2023年５月27日に、東富士演習場（静岡県）において実施された。

陸自最大規模の実弾射撃演習であるとともに、国民にも公開される演習でもある。もともとは、幹部から陸曹（下士官）まで幅広い教育を行なう富士学校で学ぶ学生に対し、戦車や火砲など陸自が保有する主要な装備品の実弾射撃を見せ、火力戦闘とはどのようなものかを学ぶ場として、1961年から開始された。完全なる部内演習であったのだが、一連の戦闘状況が分かりやすく展開していくので、自衛隊への理解を深め、国防意識を高めてもらう目的で、1966年から一般公開も開始された。

しかしながら、コロナ禍に陥ると、感染予防の観点から2020年以降公開中止に。さらに、かつては夏の風物詩であったが、主体となる富士学校の教育状況、夏の異常気象等を勘案し、2020年から５月開催へと変更となった。

今年は“アフターコロナ”と言えるほど我々の生活は以前の活況を取り戻しつつあり「総火演も一般公開復活か！」と期待したものの、今度は、日本を取り巻く安全保障環境がますます厳しさを増したことを受け、防衛力を抜本的に強化する方針とし、教育訓練に注力すべく「総火演」は本来の「教育」へと戻った。そのため今年も一般公開中止。さらに、今後についても一般公開はしないと残念な発表がなされた。ただし、ネットによる生配信は行なわれており、現地ではなく、お茶の間で総火演を見る形となるようだ。

総火演は２部構成である点はこれまでと変わらない。前段は、各火器・火砲の性能を展示するための射撃となり、後段は、実際の戦闘状況に則した射撃となる。

後段のテーマは、時代の変化を受けて少しずつ変わっている。ここ数年続けて行なわれているのが、領域横断作戦下における島嶼侵攻対処だ。ここでいう領域横断とは、陸海空に加え、宇宙、サイバー、電磁波など、新たな領域を守るべく、陸海空自衛隊が連携して戦っていくことを意味する。島嶼防衛パートについては、これまで通り水陸機動団が大活躍するものとなっていた。

前段、後段合わせ、総火演は実に興味深く、すべてをお伝えしたいところであるが、誌面の都合もあるのでとくに注目すべき点をピックアップしてきたい。

まず、今回登場した新装備が多用途ヘリUH-2だ。現在、師団および旅団飛行隊に配備されているUH-1の